

## 実践4 総合学科の特色を生かしたESDの取組

愛知県立豊田東高等学校 小瀧 逸子

### 1 はじめに

創立80有余年の歴史を刻んできた本校は、県立高等学校で最後の普通科女子校であったが、平成19年に男女共学の総合学科として新しくスタートした。学科改編当初より、「夢の実現」を基本方針として掲げ、進路実現のための3つのステップ「さがす」(1年)、「ひろげる」(2年)、「はばたく」(3年)を通して自分を取り巻く社会を客観的に把握し、広い視野を持ち柔軟な考え方ができる人材の育成を目指している。コミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄さが社会的な問題となっている中で、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」における学習や体験を通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、さらには人間関係調整能力等の育成を図っている。まさに「生きる力」を育みながら、豊田東高等学校にしかできない総合学科を築き上げているところである。

### 2 研究の目的

本校では総合学科に改編する以前の平成16年度から海外修学旅行に取り組んでおり、事前準備として海外についての調べ学習を行っている。また、平成20年度からサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)事業を活用し外部研究機関と連携した自然科学教育を実践してきた。さらに平成21年度から、豊田商工会議所、豊田まちづくり株式会社などと協働し地域連携活動にも取り組んでいる。どの活動も熱心に取り組まれており、ESDの活動と重なる部分も多い。そこで「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」における諸活動を中心にESDの視点を取り入れ、学校全体として取り組むことを通して、持続可能な社会の構築に貢献できる生徒の育成を目指すことを目標に、本研究を行うこととした。

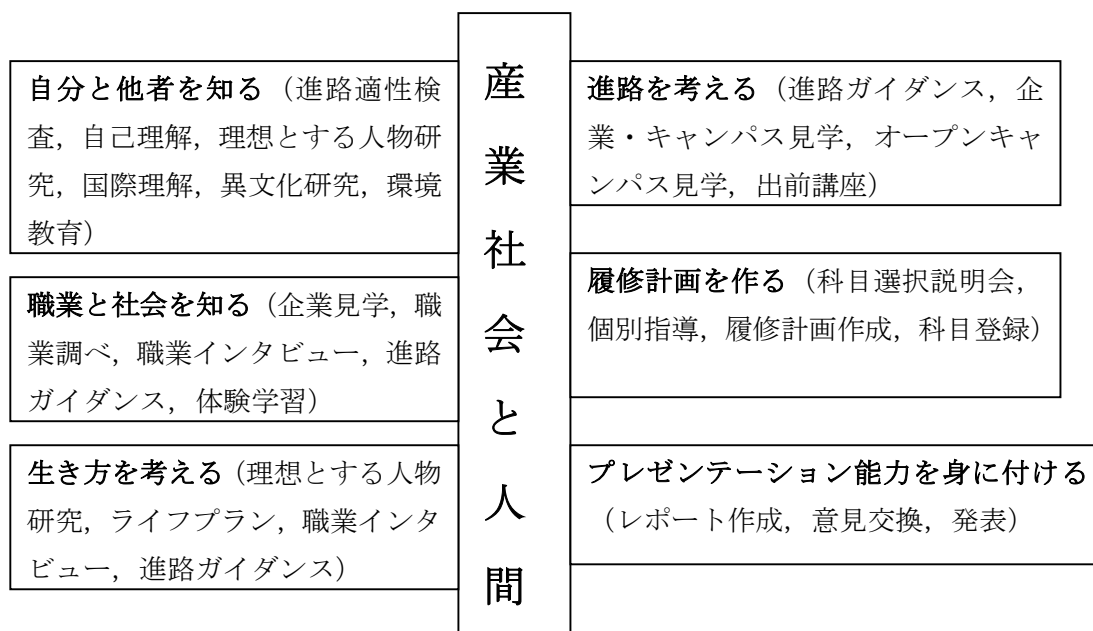
### 3 総合学科の特色

#### (1) 産業社会と人間

総合学科に学ぶ全ての生徒は、原則として入学年次に「産業社会と人間」を履修しなければならない。「産業社会と人間」は総合学科における学習の中でもキャリア教育の糸口となる重要な教科である。自己及び他者を理解する心を磨き、自分の目標を達成するために必要な社会・職業・進路などの知識を得ながらライフプラン(人生設計)を作成し、そのための進路選択、科目選択等を行っている。また学習ごとに自分の意見をまとめ、みんなの前で発表をする機会を設けることで、自分の考えを相手に伝えることはもちろん、相手の意見に耳を傾けることができるようになる。同時にプレゼンテーション能力も身に付けることができる。これまで「産業社会と人間」はキャリア教育という側面が重視されていたが、その教科目標や活動内容はESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、学び方、教え方にも合致することが分かった。「産業社会と人間」はESDの宝庫である。

#### ア 目標及び授業内容

「産業社会と人間」は週2単位実施している。授業担当は1クラスを正副担任の2人で行ない、連携をとりながら指導にあたっている。目標及び授業内容は次の通りである。



## (2) 科目選択

本校では多様化する生徒の興味・関心を考慮して7つの系列（科目群），100以上の科目が設置されている。また各生徒が科目選択を過不足なく効果的に行うために，進路に応じて12のプランを準備している。生徒は3つの要素（興味・関心，能力・適性，進路）を担当面談や，保護者も加わった三者面談を通してじっくり考え，複数の教員が参加して行う個別検討会の結果等も踏まえてプラン及びプラン内の科目を選択している。

### ■本校に設置する7つの系列

人文科学，自然科学，国際コミュニケーション，生活科学，福祉，情報・ビジネス，芸術文化

### ■12のプラン

文プラン，理プラン，外国語プラン，看護プラン，調理・栄養プラン，服飾プラン，保育プラン  
福祉プラン，ビジネスプラン，情報処理プラン，美術プラン，音楽プラン

## 4 研究の内容

### (1) チェックシートによる分析

本校の取組である国際理解教育，環境教育，地域連携教育をチェックシートに当てはめて分析した。「よりESD的」に改善するために検討し，追加できる視点をチェックシートに加えた。

国：国際理解教育 環：環境教育 地：地域連携教育

方法(技能) 内容(概念)	①批判 的思考	②システ ム思考	③未来志 向思考	④問題対 処のスキ ル	⑤行動の スキル	⑥コミュ ニケーション の スキル
I 人間の尊厳		国●			国○	国○地○
II 将来世代への責任	国○	国●	国●	地●	地●	地○
III 自然との共存		環○	環○	地○	環○	環○
IV 経済的社会的公正		国●				国●
V 文化の多様性の尊重					国○	国○

○印は従来からあったと考えられる視点 ●印は改善点として加えられた視点  
チェックシートによる検討も考慮して，各実践について検討を行った。

## (2) 国際理解教育

本校は平成 16 年度から海外修学旅行に取り組んでおり、今年度で8回目を迎える。行き先は平成 17～20 年度がシンガポール・マレーシア、平成 21 年度からはマレーシアのみとしている。マレーシアを旅行先を選んだ理由は、

- ① マレーシアが多民族国家であり、多宗教国家であること
- ② インフラが整備されていること
- ③ 治安がよいこと

以上3点である。本校は平成 19 年度に総合学科に改編したが、改編前は普通科の女子校であり、平成 3 年に国際コース 2 クラスを設けて英語教育・国際教育の充実を図ってきた背景がある。修学旅行の目的を以下に示す。

① 実際に海外に赴き、**現地の人々との交流を通して**異文化体験、異文化理解をすすめる。さらに異文化理解を通して日本文化を認識し、自分自身の理解を深める。

② 他国の文化を理解するとともに、日本文化を深く理解し、その知識を外国に向け発信できる態度を養うと同時に外国文化を受容し理解できる力を養う。

- ③ **現地の人々との交流を通して**友好を深め、国際平和を願う心を育む。

このように、現地の人々との交流に重きを置いており、旅行日程では現地のチェラス中等学校との交流やB&S（ボーイズ&シスターズ）プログラムに十分な時間を割いている。

### ア 国際理解 異文化研究

1 年生の「産業社会と人間」では、国際社会に目を向け、世界と自己との関わりを考えることを目的として、国際理解、異文化研究を計画している。2 年生の「総合的な学習の時間」では、年度初めから修学旅行に出発する 10 月中旬までは、修学旅行事前学習の意味も含めて、マレーシアを中心とした異文化研究を行っている。実施内容は次のとおりである。

内 容	形 態
ガイドブックの作成 次のテーマに沿って、マレーシアについて調べ、原稿としてまとめる。 ①自然・地理：地図上の位置・地理、熱帯雨林の気候・風土、特徴的な動植物など ②民族・宗教：多民族国家とは、宗教の違い、宗教的タブーなど ③言語・芸術：マレー語入門、国歌を歌おう、マレーシア音楽事情など ④生活・教養：衣食住、スクールライフなど ⑤歴史・文化：からゆきさん、日本の侵略、占領時代など ⑥マレーシア見所マップ：市街地マップ、名所旧跡案内など	グループ
現地の交流で用いる自己紹介カード、ピクチャーブックの作成	個人
チェラス中等学校との交流計画作成 折り紙、あやとり、切り絵、昔のおもちゃなど日本文化を詳解し、歌や踊りのパフォーマンスを行うための計画をする。	グループ
B&Sプログラムの計画作成 マレーシアに住む学生・社会人が各班に割り振られ、約6時間、クアラルンプール市内を一緒に見学するための計画をする。生徒が作成したプログラム内容は旅行前にその班を担当するマレーシアの学生・社会人に渡され、検討され、必要に応じて見直しをする。	グループ

また、修学旅行後は現地校交流とB&Sプログラムを中心に報告書を作成する。

## イ ESDの視点をプラスした国際理解教育

これまでも「産業社会と人間」の中で異文化理解教育として、1年生の3学期に外国についての学習を行っていた。しかし2年生になって行なう修学旅行事前学習との関連性や修学旅行先であるマレーシアの環境問題についてあまり触れていないことなど気になる点が見られた。そこで今年度は「第8回 AKK・名古屋キワニス国際理解教育研究」指定校となったことを機に、修学旅行を単に「経験」として終わらせるのではなく、生徒一人一人がグローバルな視野を身に付けるための継続的な取組と位置付け、1年生と2年生で個別に計画されていた国際理解に関する取組を有機的に結び付けるようにした。また、その際ESDの視点として「人と人とのつながり、資源・エネルギーの有限性、人と環境との関わり、自然・文化・社会・経済の関連、文化の多様性、人権・生命の尊重」などをプラスした。研究計画は以下の通りである。

### 1 事前学習の充実

1年生の「産業社会と人間」における国際理解、異文化研究において、国際社会を考えるきっかけとして今年度は平成24年1月にマレーシア国籍で日本在住の女性をゲストティーチャーとしてお招きし、マレーシアの文化、環境、教育などについての講演会を実施する予定である。生徒はその後の異文化研究で特にマレーシアの環境問題を取り上げ、調べ学習を行うことで修学旅行先であるマレーシアへの興味・関心を高める。それを踏まえて、2年生の「総合的な学習の時間」ではマレーシアの文化を様々な観点からグループごとに調べ、成果を全体に発表することで個別に学習した内容を共有し、交流相手への理解を深める。また日本についての理解を深め、交流時に説明できるように学び、社会や文化の違いを認識する。

### 2 交流の方法の模索

言語の違いを乗り越えて交流するための方法を考え、実践する。

### 3 発展学習と地域連携

修学旅行後、各自で報告書を作成したり、日本在住のマレーシア国籍の人との交流を図るなどして自分の触れたマレーシアの様子を客観的に把握し直し、考察を加えるとともに、継続的な文化交流を目指す。

### 4 成果の報告

総合発表会で全校生徒に向けて成果を報告するとともに、まとめ冊子を作成する。

今年度はこれまで行なっていたアンケートの見直しをした。具体的にはアンケート項目に次の内容を追加した。

#### <事前準備について>

1 事前に準備したガイドブックは役に立ちましたか。

①役に立った ②あまり役に立たなかった

2 事前に準備したピクチャーブックは役に立ちましたか。

①役に立った ②あまり役に立たなかった

3 事前に計画したB&Sプログラムはどうでしたか。

①ほぼ計画通りにできた ②計画通りに行かなかった

4 修学旅行事前オリエンテーションについて

①良かった ②どちらともいえない ③変更した方がよい

自由記述として

・修学旅行に行く前後での、自分自身のマレーシアに関するイメージを答えなさい。

- ・修学旅行でマレーシアに行く意味を、日本とマレーシアとの関係を考えて答えなさい。
- ・B&Sプログラムで、現地の大学生と話した内容はどんなことでしたか。
- ・この修学旅行を通して、他国の相手を理解する上で、最も重要だと思うことを下記から選びなさい。また、選んだ理由も書きなさい。
  - ①他国の言語を身につけること      ②他国の宗教を知ること      ③他国の歴史を知ること
  - ④他国の習慣を知ること      ⑤自国の理解を深めること

修学旅行前に十分な時間をかけて行ってきた事前学習に対して、振り返りのアンケート項目を追加したり、修学旅行の重点目標である現地における交流に対して具体的にどのような話をしたのか、また相手を理解するために自分たちに必要とされることは何だったのかなど質問したりすることにした結果、以下のような生徒の声を聞くことができた。

- ・他国の相手を理解するにはまず自国を理解することが必要だと思う。日本とマレーシアの違い（特に宗教や習慣）を理解し、認識することが大事だと思う。
- ・日本とマレーシアでは言葉も違うし宗教も違うけれど、相手が何を言いたいのか考えたり自分の言いたいことをどうすればうまく伝えられるか考えたりすることができた。うまく言葉が話せなくても心は通じ合うことができることを学んだ。
- ・マレーシアにはマレーシアの宗教や習慣があるから、自分の意見だけを押しつけず、理解しようとする心掛けが必要だと思った。
- ・同じアジア圏としてお互いに違う部分を探したり、共通点を見つけたり学ぶべきことが多くあった。実際に見て体験することで詳しくより確かなものを見つけられるのが今回の修学旅行だと思った。
- ・言葉が通じないことを経験し、言葉を伝えることの大切さと通じたときのうれしさを感じた。

### (3) 環境教育

本校では平成20～22年度、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）事業を活用し、外部研究機関と連携した自然科学教育を実践してきた。本校の横を流れる矢作川で外来生物であるカワヒバリガイの調査を経年観察で行ってきた。今年度は矢作川「森とさかな」野外調査として、第2学年理プランの生徒の中から希望者を対象に野外調査をともなう探求活動を実施することとした。研究計画は以下の通りである。

#### 1 事前授業

#### 2 矢作川の水生生物調査

昨年までの3年間の調査日と同じ日程・場所で矢作川の水生生物調査、特に外来生物のカワヒバリガイの調査と試料採集を行う。

#### 3 豊川水系の水生生物調査（矢作川との比較検証のため）写真1

昨年の調査日と同じ日程・場所でカワヒバリガイの調査を行う。さらに大島ダムの放流水の影響を受ける宇連川支流からもカワヒバリガイの採集を試みる。

#### 4 矢作川流域の人工林の調査 写真2

豊田市矢作川研究所の森林研究者や里山に暮らす山主さんたちとも連携して、市内の人工林の植生調査を行う。

#### 5 事後活動と発表

平成24年2月の総合発表会及び3月の矢作川学校ミニシンポジウムにおいて研究成果を発表する。

この事業において、昨年度までのSPP事業の中心メンバーであった本校卒業生には野外調査のティーチングアシスタントとして参加してもらい、調査の指導だけでなく在校生との交流や技術の継承

を図る役目をお願いした。調査に参加した生徒からは次のような感想が聞かれた。

- こんなにもきれいな川に外来生物のカワヒバリガイが大量に繁殖していて驚いた。
- ふだんあまり行かない山奥に行き、都会から離れてみていろいろと学ぶことができた。多種多様な植物が共存できる雑木林に魅力を感じた。
- 林業の持続不可能性と人の手が入らないと森がどんどんだめになっていくという現実がよく分かった。



写真1 豊川水系の水生物調査



写真2 矢作川流域の人工林の調査

1年生の「産業社会と人間」では地域環境研究に4時間を計画しており、例年地域環境に関する学習を行なった後、実際の地域環境を見るため、地域の清掃ボランティア活動を行なっている。今年度も研究及びボランティア活動を計画中であるが、ESDの視点として「人と人とのつながり、将来世代に対する責任、将来像についてのビジョン」をプラスし、地域環境研究において自分たちが住む豊田のまちづくりに着目し、若者が定着する住みよいまちづくりへの提言をすることにした。この提言をゲストティーチャーである豊田市商店街連盟挙母ブロック長に事前に見ていただき、講演会の中でまちづくりへの提言について意見交換を行う計画を立てている。ゲストティーチャーは昨年からの本校の地域連携をよく知っておられ「豊田東高校の生徒は、様々な地域連携活動にも積極的に参加してまちづくりに貢献している。大変ありがたいことである。これからも若いエネルギーに期待している」とのお言葉をいただいている。まさに地域における人とのつながりを重視し、地域の課題を解決する力の育成へと向かっていることを実感した。

#### (4) 地域連携教育

本校では地域社会に主体的に関わり、地域社会を創っていく担い手の育成を目指して地域連携活動に取り組んでいる。平成21年度、ビジネス研究部の活動において、地域の抱える課題に取り組み、地域経済の活性化を研究するために市街地活性化事業に参画した。その後、ビジネス研究部が地域の様々な組織と連携して事業の企画や協働事業のコーディネートを担うこととなった。平成21・22年度の実施内容は以下の通りである。

	概要	本校の参加生徒	備考
H21 9.19	大学教授の講義 「豊田市の歴史やビジネスシーズを調べよう」	ビジネス研究部 (15名)	商工会議所、商店主、大学生とともにまちづくりや地域活性化の基礎知識を学習
11.4	第1回 パブリカワークショップ	パブリカ=まちづくり活動センター	パブリカの活用方法についての市民ワークショップ
H22. 1.20	第2回 パブリカワークショップ		パブリカの活用方法についての市民ワークショップ
7月～8月	パブリカの家具作成		高等専門学校生から学んだことを小学生に教えながら作成

9. 12	第1回まちあるき		参加者と豊田市の歴史や食について学びながらまちを歩く
11. 3	第2回まちあるき		参加者と歩きながらエコマップを作成
11. 8	講演 豊田市のまちづくりの取り組み	「産業社会と人間」の授業1年240名 「総合的な学習の時間」の授業2年240名	豊田市中心市街地活性化協議会のタウンマネージャーによる講演
6月～12月	パブリカのシャッターデザインと描画	美術部(19名) 3年美術プラン(9名)	6月にデザインコンペ 10月から描画
10月～12月	地域ブランド開発 豊田市名産の梨を使った商品開発 写真3	2・3年調理プラン(28名)	商工会議所青年部と連携して実施。12月のイベントで成果発表
	着ものリメイク	3年服飾プラン(19名)	商店街と連携して実施。12月のイベントで成果発表
12. 18	ハイブリッドフェスタ2010	2・3年調理プラン 3年服飾プラン JRC部	梨を使ったお弁当の販売 着ものリメイクファッションショー イベントの手伝い
12. 18	イルミネーションストーリーinとよた2010 まちなかクリスマスパーティー	3年服飾プラン ビジネス研究部 合唱部 吹奏楽部 JRC部	着ものリメイクファッションショー 企画・運営・司会 クリスマスソング合唱 演奏 司会・進行
H23 3. 5	第1回市民講座 絵手紙と落款教室 (パブリカにて) 写真4, 5	美術部 書道部	参加者に絵手紙と落款作りを指導



写真3 梨を使った商品開発

写真4 絵手紙作り

写真5 落款作り

平成23年度は、それまで中心となって活動していたビジネス研究部が部員減を理由に地域連携活動を停止したことから、学校という組織が主体となって地域連携に関わることの必要性から、校務分掌のひとつである総合推進部が中心となって取り組むことになった。平成22年度に引き続き、中心市街地活性化事業と協働し、その中でも商店街活性化事業に参画する方針を決めた。商店街は学校から近く、まちづくりに熱心に取り組んでおられる桜町本通り商店街に決定した。具体的にはイベント(5月に

行なわれたふれ愛フェスタ 2011)への参加, 商店街のバナー(宣伝用の旗)の製作, 八日市のお手伝いなどを行なっている。八日市のお手伝いではボランティアチーム「チーム八日市」を結成し今後も学校が休みの土・日曜日と八日市が重なったときには参加する予定である。さらに、昨年も実施した地元の商品開発にも取り組んでおり、今年度は「米粉」を使った商品開発に2・3年生調理プランの生徒が関わっている。10月に静岡県浜松市三ヶ日町で行なわれた「高校生F級グルメ甲子園」には5チームがエントリーし、その中の2チームが実際に三ヶ日地域自治センターで調理・販売を行なった。その結果、参加者による投票では2位を、さらに企画、店舗の清潔感、接客態度などが審査員に高く評価され特別賞をいただいた。12月にトヨタスタジアム行なわれるイベントでは米粉を使ったクレープと井ものの販売が予定されている。また同日、同会場で3年服飾プランの生徒によるファッションショーが行なわれる予定である。テーマを「再生」とし、着なくなった服をリメイクして新しい服に仕上げることに取り組んでいる。このような地域連携では、高校生が地域社会活動に主体的・継続的に関わり、企画・運営・評価の一連の活動をすることによって、自己の将来を考えるとともに、地域を見直し、地域社会を自分たちで担っていくという公共の精神を高め、コミュニケーション能力や調整力など社会参画のスキルを身に付けることを目指している。平成22年度までの活動に加えたESDの視点は「社会や環境の時間的変化、体系的・総合的なものの見方・考え方、将来世代に対する責任」である。平成23年度の活動内容を以下に示す。

	概要	本校の参加生徒	備考
H23 5. 29	豊田てらこや事業との協働 「今日から君もプロカメラマン」写真6	写真科学部(10名)	地元の小学生29人を対象に写真指導。撮った写真をもとにスクラップブックの作成
5. 30	桜町本通商店街 ふれ愛フェスタ 2011 写真7	3年保育プラン(16名)写真科学部・科学班(7名)美術部(7名)家庭部(25名)JRC部(24名)美術部	保育プラン:紙芝居,動物ビンゴゲーム 科学班:おもしろ科学 美術部:手作りジグソーパズル 家庭部:模擬店(焼きそば等) JRC部:さかなつりゲーム ロケットわくぐり,まとあてゲーム 用旗(バナー)の製作
7月~11月	商店街バナー製作	美術プラン	桜町本通り商店街店舗の広告
10. 8	チーム八日市 写真8, 9, 10	ボランティアの生徒(17名) 合唱部(10名)	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い 青空コンサート
10. 30	高校生F級グルメ甲子園 写真11	3年調理プラン4名	浜松市制100周年記念行事として行われるグルメ甲子園に参加,米粉を使ったクレープを販売予定



12. 10	絵手紙と落款作り 着物トートバッグ	美術部・書道部生徒 3年服飾プラン3名	生徒が講師役となり、年賀状用の絵手紙と落款を作る 着なくなった着物を再利用してトートバッグを作る
12. 18	ハイブリッドフェスタ 2011	2・3年調理プラン 3年服飾プラン JRC部	米粉を使った商品の販売 リメイクファッションショー イベントの手伝い
H24 1. 8	チーム八日市	ボランティア生徒	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い



写真6 スクラップブックング



写真7 ふれ愛フェスタ 2011



写真8 青空コンサート



写真9 八日市



写真10 チーム八日市



写真11 グルメ甲子園

計画に従って、多くの生徒が実際に学校の外で地域連携活動をしている。ESDを知らない生徒たちが「人と人のつながり」を肌で感じ「自分たちのこれまでの学習の成果を生かす」ことを総合的に体得し、何より地域の人々から喜ばれ、励まされ、期待されていることは素晴らしいことである。

### (5) 総合発表会

「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」のまとめとして、また特色ある授業の発表の場として、本校体育館で発表の場を設けている。この発表の場を設けることは、各学年・各教科の代表発表者が自らの体験や学習内容をまとめて発表する。1年生は自らのライフプランを、2年生は海外修学旅行の取組を、3年生は進学先や就職先についての課題研究などについて、プレゼンテーションする。特に3年生が下級生に対して、自らの学びを発表することで、下級生は学びの目標を知り、プレゼンテーション能力に違いがあることに気付き、自らも成長しなければいけないことを再認識する。そして先輩たちの学びを引き継ぎ、さらに発展させようとする意欲にも結び付いていく。平成23年2月15日に行なわれた総合発表会は全学年がそろそろ2回目の発表会となったが、3年生が総合司会を務める中で大変中味の濃い素晴らしい発表であった。本校において総合発表会は生徒が学んできた知識や体験の共有であると同時に意識の共有にも役立っていることが分かった。平成22年度総合発表会の生徒の感想を以下に示す。

- ・初めて先輩たちが1年を通して行っていたことを知り、東高校でのこれからが楽しみになった。そして今回の発表を聞いて、今までの考えを大きく変えるものとなったし「高校生活の理想」を作ることができた。(1年)
- ・どの学年の発表者も自分自身の夢をしっかりとっていて、その実現に向けて精一杯努力していることを感じた。東高校は総合学科で様々な夢をもった人が集まっているけれど、その一人一人が真剣に自分の夢と向かい合っていることが、他の人との高め合いになっていることを今回の発表を聞いて感じた。(1年)
- ・総合学科でしか味わうことのできない発表なので、楽しみにしていました。3年生の発表はさすが先輩と思わせるような発表でとても参考になりました。そして3年生は私たちにたくさんのメッセージを伝えてくれました。3年生はいろんな観点で物事を見たり考えたりしていてすごいなと思いました。(2年)
- ・来年は自分たちが今の3年生と同じようになれるよう、また後輩のお手本となれるようもっと成長していきたいと思った。(2年)
- ・1年生は今の時点で将来の夢があり、そのために自分が今何を学ぶべきかを確実にしていて素晴らしいと思った。夢の実現は大変かもしれないけれど頑張りたい。自分もこれからのライフプランをしっかりと立てていかないといけないと思った。(3年)
- ・東高校では普通科の高校では学べないことがたくさん学ぶことができたと思う。(3年)

## 5 研究のまとめと今後の課題

総合学科としてスタートし5年が経過し、この春2回生を送り出した。1回生、2回生の進路状況からも生徒が掲げた「夢の実現」は絵に描いた餅ではなく、「豊田東高校で学んでよかった」「希望していた職種に就職できた」「大学でさらに自分の夢に向けて頑張ります」など生徒一人一人の夢は確実に実現へと向かったと思われる。今春の中学生の本校への志願状況から見ても今や豊田東高校は中学生が入学したい学校となり、中学校の先生や保護者、そして地域からも期待される学校になってきた。豊田東高校の数多くの取組が学校誌「夢風」やホームページを通じて広報されたことに加えて、生徒が「豊田東で学んでよかった」ことを実感し声に出している結果ではないかと思う。

今回、ESDと関わる機会をいただいたが、初めはESDの概要すらつかめていなかった。しかし、研究を進めるうちに少し視点を変えるだけでESD的な取組になることや、ゲストティーチャーをどのタイミングで呼び、講演会の事前指導をどこまで徹底するかで学びの深さに違いが出てきた。今後は国際理解教育や環境教育、地域連携教育の取組を単発に終わらせることなく、「つながり」をもって取り組むとともに、教科・科目においてもESDの視点を取り入れ、「持続可能な社会の構築に貢献できる生徒（人材）を育てる」という意識をもつことが大切であると感じた。現在本校は「ユネスコスクール」に登録を申請中である。これを機会としてさらにESDの取組を充実させたいと考えている。

この研究協議会の一員となり甚目寺小学校、緒川小学校、新香山中学校の取組を知り、研究を進めていく中で、学びの面白さや学びの深さを実感した。そうした学びを経験した子どもたちが高校生となって私たちのところにやってきたとき、小・中での学びをさらに深めていける態勢（体制）を準備しておくことの必要性を強く感じた。ESDの目的でもあるつながりが「人と人とのつながり」となり「未来へのつながり」となるよう、さらに自分自身も学び続けていきたいと思う。